

取り返すまでの物語

みかみ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オリ主が誰かさんに奪われた友達の個性を取り返そうと頑張る話

目次

取り返すまでの物語	1
第2話	9
第3話	16
第4話	21

取り返すまでの物語

夕焼けに照らされ、赤く染まる公園で彼女は言った。

『おつきくなったら一緒にヒーローになろっ！』

いつかの古い記憶だ。

まだ俺たちが小さかった頃の大切な記憶だ。

その後、2人で話し合ったんだ。

確か、どんな風にデビューするか、どうやって戦うか、そんなことを話した。

俺は結構乗り気で彼女と話した気がする。

今では、彼女と話すことも叶わない。

暗くなるまで夢中で彼女と遊んで、話して、

いつも通りの日だと思ってた。

でも

『とてもいい“個性”だね。僕に貸してくれないかな？』

男がそう言って歩み寄って来た。

俺たちは子どもながらにソレに恐ろしさを感じて必死に抵抗した。

暗い街中を助けを求めながら走った。

街は暗く、いつもならある人通りも無かった。

息も絶え絶えになって逃げ込んだ廃工場で思わず座り込んでしまった。

そこにはあの男がいて、俺たちは何もわからないままねじ伏せられた。

俺が最後に見たのは、男に頭を掴まれた彼女だった。

その後のことはあまり覚えていない。

次に目が覚めたのは病院で、俺たちは2人とも入院した。

入院している間に警察に事情を聞かれたり、男の特徴を聞かれたりしたけれど、あれだけ恐ろしかった男の姿が臃げで思い出せなかった。

それから2ヶ月も経てば俺は退院した。

でも、10年が経った今でも、彼女の目が覚めることはなかった。

「何の為にここに來てんだ」

巨大なOP敵から我先にと逃げ出す受験生たちを視界に収めながら、準備をする

あのデカブツを倒す準備だ。

頭部を貫くイメージをする。

左の手のひらを標的に向ける。

力は充分溜まった、あとはこれを放つだけ。

「俺の邪魔をするな」

文句を1つ挟んだところで、

光を放った

「このリスナーもスゴかったよな!! OP敵に風穴開けてて、これにも思わず叫んじまつたぜ!!」

モニターにはOP敵の頭部を貫く白い光が映っている

だが、やはり気になるのが、この受験生が10年前に起きたある未解決事件の被害者である、ということだ。

こいつは多分雄英に入学するだろう。

その時、こいつが自身の抱えているものを克服しないと、雄英が与える壁は乗り越えられない。

本当のヒーローになれるかはそこで別れる。

「なあイレイザー！お前もそう思うダロ!?」

「うるさい」

「さあ！相澤君も山田君も次の受験生の評価にうつるのさー！」

こうして長い作業は続いていった

「なんだか呆気なかつたな」

自分の部屋に戻り独り言をこぼす。

先程まで行っていた試験のことだ。

でてきた仮想敵は全体的に脆いものだったし、冷静にあたればそう難しいものではな

かった。

ただ、最後の巨大なOP敵は時間も体力もだいぶ消費してしまった。

「またまだ改善点はあるな」

あとは合格発表を待つだけだ。

雄英に入学して、力をつけて、ヒーローになってアイツを

「捕まえる」

俺の目標を再確認したところで、いい加減疲れたから飯食って、風呂入って、寝るか。

く数日後く

「やつと来たか」

目の前に置いてあるのは雄英からの封筒だ。

今朝、家のポストを確認したときに発見したものだが、妙な膨らみがある。

「?」

手紙と同封されていたそれを取り出してみてもイマイチ何だかわからない。

しばらく適当にいじってみる。

すると、どこかのボタンを押したようで、

『私が投影されたっ!!』

画風が濃い大男がいきなり映し出された。

「……」

『驚いたかなっ?!?驚いたよねっ!!何故雄英の合格通知で私が出てくるって?』

何故なら私が雄英の教師になるからさ!』

「……」

『巻きで話さなきゃいけないから手短かに伝えるぞ、霊弾少年!』

筆記は十分合格圏内だ、言うことなし!

そして、実技だが、見事な実力で仮想敵を倒していたね!

敵P 78P! これだけでもかなり凄いが、我々が見ていたのはそこだけではないんだ。

もう1つの採点基準、救助P! 審査制で30P!

それらを合わせて 108P! 今回の試験のトップさ!

待っているぞ、霊弾少年!

ここが君のヒーローアカデミアだっ!!』

プツンと途切れる映像

口角が釣り上がるのを自覚する。

目標に近付いたのだと思うと歓喜する。

ようやくだと、ここから始まるんだと心が荒れ狂う。

「全て返して貰うぞ」

何度目かわからない宣戦布告をした

第2話

あれからまた数日経って

雄英高校初日の朝

いつも通りのうるさいアラームを止め、諸々の準備は終わった。
鏡に写る自分を見る。

不景気そうな面構え、見慣れた顔に見慣れない真新しい制服。

おかしいところは無い。

用意が整って、忘れ物もない。

何の感慨もなく、戸を開け家を発つ。

「行ってきます」

最近独り言が増えたかな

「でかい」

目の前の扉に対して思わずこぼした言葉
バリアフリーか

5メートルくらいはあるんじゃないか？

そんな扉を開けて教室に入る。

「む？」

扉を開ける音に誰かの声が返ってくる。

既に1人登校していたらしい。

「ボ……俺は私立聡明中学出身、飯田 天哉だ。よろしく」

眼鏡を掛けたいかにも真面目そうな男が声をかけてきた

「霊弾 幕斗だ。よろしく」

挨拶を返したあと、再び扉が開く音がする。

「霊弾くん、俺は他の人にも声をかけるから、これで。

同じクラスの者として頑張ろう。」

「ああ。」

気の無い相槌を打つ。

やっぱり真面目だ

それ以降は何も起こらず、席に座っていた。

席は1列5人で、それが4列。

ではなく、廊下から1番離れた列だけ6人の列になっている。

合計で21席あるが、中途半端だな。

ちなみに俺は今、1つだけ飛び出ている21席目に座っている。

そんなことを考えている間に、自称担任の不審人物（相澤 消太と名乗っていた）が現れた。

体操服に着替え、グラウンドに集まれ、とのことだ。

「個性把握……テストオ!？」

何人かが叫ぶ声が聞こえる

入学式やガイダンスに出ることなくこのテストを行うらしい。

一般的な体力テストに個性を使用して記録を測るようだ。

そして、

「霊弾」

担任に話を振られた。

「中学の時ソフトボール投げ何メートルだった？」

「62メートルですが」

なぜ俺に？

「じゃあ個性使ってやってみろ。円から出なきゃ何してもいい。早よ」

そういえば、入試トップだったな。

「思いつきりな」

投げ渡されたボールを見ながら円に入る。

「じゃあ」

自分の中にあるよくわからないエネルギーで包みこむ。

高密度のエネルギーを圧縮してサッカーボール程の大きさの球を作り出す。

ざわめく周りを無視して前方45度に射出。

100メートルを過ぎた辺りでコントロールが効かなくなり失速。そして、散々込めたエネルギーを爆発させた。

それは丁度白い花火のようで、中に入っていたボールを後押しした。ボールが地面に着く頃には姿が見えず、

担任が持っている計測機器には

「652.3メートル」

そんな記録が映し出されていた。

「なんだこれ！すげー面白そう!!」

「650ってマジかよ」

「個性」 思いつきり使えるんだ!!さすがヒーロー科!!」

そんな生徒たちのはしゃぐ姿がマズかったようで、

最下位は除籍処分にするらしい。

プ
ラ
ス
ウル
トラ
P
u
l
s
U
l
t
r
a
ら
し
い

俺の個性はよくわからないと医者に言われたことがあるが、自分では中々使い勝手がいいと思っている。

体から噴出させればそれなりに推進力を得ることができるとし、相手に向けて噴出すればそれだけで攻撃になる。

つまり、移動なんかに限っては増強系個性の真似事くらいはできるといふことだ。

そして、爆発するやつがやってたように体から噴出させて記録をのばすこともできる。

俺がこのクラスの21番目だったようで、一緒に記録を測る人がいないので気兼ねなく個性を発揮できる。

ソフトボール投げでは投げ方を変えて俺の記録が少し伸びたり、指を怪我するやつがいたり、それに嘔み付こうとした爆発するやつがいたりしたが、特に問題はなく終了した。

「んじゃパパつと結果発表」

結果を映しだす担任

「ちなみに除籍はウソな」

「……………!?!?」

第3話

あの個性把握テストが昨日の事となり、ヒーロー科の授業が始まる。

初日からぶっ飛んだことやったので、次の授業では何をするのかと身構えていたが、

「んじゃ次の英文のうち間違っているのは？」

（普通だ）

（くそつまんね）

普通だった。

「おらエヴィバディヘンズアップ盛り上がれー！！！！」

こうして午前の授業は普通に終わった

「白米に落ち着くよね最終的に!!」

米推しだったのか、ランチラツシユ。

いや、たしかに美味しいから文句は無いが。

しかしこんな美味しい料理を安価でいただけるとは、ありがたい。

ところで、ランチラツシユは敵退治とかするのにか？

やはり調理器具で相手を叩きのめすのだろうか？

そんな無駄な事を考えていると

「隣いいか？」

髪の毛が紅白に別れているイケメンに声をかけられた。

「ああ…どうぞで。」

何も問題はないので了承の意を返す。

「わりのいな。」

という言葉とともにカチャリとお膳を置く音が聞こえる。蕎麦か。

ランチラツシユのあの米推しを聞いてなお蕎麦を選ぶとは、こいつかなりの蕎麦好き

か…？

隣人について思考を巡らせながら無言で食べ進めていく。

あちらも話す気が無いようで、一足先に食べ終わった俺はお膳を返却するために立ち上がる。

トンカツ定食はとても美味しかったです。

”オールマイト”

「わーたーしーがー!!」

この世の多くの人が認めるNo.1ヒーロー

「普通にドアから来た!!!」

世間からは平和の象徴とも呼ばれており、

実際に、オールマイトがNo. 1になってから犯罪件数も減っているという。

悪に対する抑止力となり、敵ツインからしてみれば恐怖の象徴となっているだろう。

そんな凄い人に教鞭をとってもらい、自らを導いてもらえるという事でクラスの興奮はおさまらない。

俺も例に漏れずかなり楽しみだ。

あの人に導いてもらえば、今よりもっと強くなれる。そんな気がする。

「ヒーロー基礎学・ヒーローの素地をつくる為様々な訓練を行う課目だ!!」

謎のポーズを決めながら単位数も最も多いと補足するオールマイト

「早速だが今日はコレ!!戦闘訓練!!!」

BATTLEと書かれたプレートを掲げて宣言する。

「そしてそいつに伴って……こちら!!!」

オールマイトが言うと同時に教室の壁がせり出てくる。

番号が書かれたアタッシュケースが壁に保管されていたらしい。

「入学前におくってもらった”個性届”と”要望”に沿ってあつらえた……」

「戦闘服!!」
コスチューム

「まあ、騒めくクラスに着替えてグラウンドβベータに集合と伝えて一足先に出て行くオー
ルマイト

「さあ、どんな戦闘服コスチュームになっているか
逸る気持ちを抑えて更衣室へ向かう。」

「雄英こへいで俺は誰よりも強なくなるんだ。
そんな決意を胸に秘め、歩いて行く。
これまでも、ここから。」

第4話

モニターにはボロボロになったビルが映し出されている。

その状況を作り出した2人も、片方は両腕に酷い怪我をして

「これしか…思いつかなかった…:…:」

絞り出すように言った。

それでもう片方は呆然と立ち尽くして

「…っ」

モニターに映っている

『ヒーローチーム…』

一拍おいて

『WIIIIIIIN!!!』
ウイーン

ヒーローの勝利を告げた

今俺たちは戦闘訓練のため、2人一組で「敵」と「ヒーロー」にわかれて2対2の屋内戦闘をしている。

設定はアジトに「核兵器」を隠している「敵」とそれを処理する「ヒーロー」という構図だ。

「ヒーロー」は制限時間内に「敵」を捕まえるか「核兵器」を回収するのが勝利条件であり、対して「敵」は制限時間まで「核兵器」を守るか「ヒーロー」を捕まえる。

捕まえたと判断されるのはそれぞれが渡された確保テープを相手に巻いたとき、「核兵器」は触れれば回収とする。

コンビ及び対戦相手はくじで決める。

そして、このクラスは全員で21人在籍しているので、一組だけ3人のところがでてる。

2人对3人だと不公平かもしれないが、不利な状況なんてプロになれば沢山あるから今のうちにに経験しておこう、とのこと。

ちなみに俺がその3人グループの1人だった。運がいいな。

まあ出番が回ってくるまではモニター室から他の生徒の戦闘を見学するということ

だが。

「負けた方がほぼ無傷で、勝った方が倒れてる…」

クラスメイトの誰かが言った。

今行われた最初の試合のことだろう。正にその通りだ。

勝ったヒーローチームの緑谷・麗日ペアだが、緑谷は片腕がバキバキに砕けておりもう片方の腕は酷い火傷を負っている。

麗日は個性の許容量キャパシティオーバーで気分が悪いようで、今日の昼ごはんだろうか、戻している。

対して敵ライオンチームの爆豪・飯田ペアだが、目立った怪我は無いようだで、余力があるように見える。

講評の時間ということで試合を行っていた生徒をオールマイトが連れて戻ってきた。

オールマイト曰く、一試合目のベストは飯田らしい。

その理由を生徒に答えてもらおうと、拳手を促す新米教師オールマイト

「ハイ、オールマイト先生」

そう言って拳手する…確か、八百万だったか？

名前をしつかりと覚えてなかった。

その八百万が初戦の爆豪、緑谷、麗日の悪い点を論理的に指摘する。すごいインテリな感じだ、下学上達らしい。

でも、言うこと無くなったオールマイト困ってるな…

講評もおわったところで次に戦う組の発表に移る。

第2戦を行う組をくじで決め、オールマイトが発表する。

「気を取り直して、次の組はこの2チームだ!!」

HERO Bチーム 轟とどろき 焦凍しょうと & a m p ; 障子しょうじ 目蔵めぞうペア

V S

VILLIAN Iチーム 尾白おしろ 猿夫ましらお & a m p ; 葉隠はかくれ 透とおる & a m p ;

霊弾れいだん 幕斗まくとトリオ

早速出番だ。

「尾白くん、霊弾くん私ちよつと本気だすわ

手袋もブーツも脱ぐわ」

「うん…」

葉隠…透明人間としては正しいんだろがやばくないか、女の子的に

お互い微妙な顔をして向き合う尾白と俺がいた。
ほら困ってるよ

「あー…取り敢えずみんなの個性や作戦について話し合おうか。」

「ああ」

「オツケー！」

尾白の提案に乗っかる俺と葉隠

「じゃあまずは俺からでいいかな。」

俺の個性は見ての通りこの“尻尾”だ。自分の体重も支えられるくらいには力もある。

あとは、いちおう武術をやってるから近接戦闘はできるよ。…こんなもんかな。」

近接戦闘で力が発揮される感じか…

「ハーイ！次私ね！ 私も見ての通り”透明”だよ！

潜入隠密お任せあれっ！」

透明か…奇襲や待ち伏せなんかもできるな…

次は俺の番か。

「俺の個性は、表すのが難しいな…。簡単に言えば、未知のエネルギー的なものを生成し操作する。」

「?。」

俺の説明に疑問符を浮かべる2人。

「実際見た方が早いかな。」

手のひらからエネルギー放出する。

「これの反動を利用して移動を補助したり」

放出したエネルギーを球状に固定する。

「これを相手にぶつけて炸裂させる。」

「おおー」

他にも小技があつたりするが、個性についてはこんなもんでいいか。

最後にもう一つ

「あとはこの棍で殴る、位が俺のできることだ。」

手に持った170センチ程の棍を見せる。

コスチューム
戦闘服を作ってもらう際に要望を出して、一緒に作ってもらったものだ。

「習ってたの?」

「ああ。」

「これでお互いの出来ることがわかったし、作戦を立てよう。」

そう言う尾白に意見を出す。

「お互い会って日も浅いし、連携は期待しない方がいいんじゃないか？」
続けて伝える

「だからここはお互いが出来ることに集中するのが良いと思うんだが。」
「出来ることに集中…？」

「ああ、尾白なら相手から近寄ってくるポジション、核兵器の防衛。」

葉隠なら尾白が交戦してる相手への奇襲、といった具合だ。」

「たしかにっ、それならなんだか簡単そうに思えるね！」

「うん、正直作戦とかどうしようとおもってたんだ。助かったよ」

葉隠と尾白の同意も得られたのでこの方法で行くか…

「ところで、霊弾くんは何をするの？」

葉隠から質問が来た。俺か…やっぱり

「遊撃かな」

そんなこんなで作戦も大まかに決まり、

『2チームとも、準備はいいかい？』

先程、確保テープやビルの見取り図と一緒に渡されたインカムからオールマイトの
声が聞こえる。もう時間らしい。

核兵器は最上階である5階でいいか。

「頑張ろうねっ！尾白くん、霊弾くん！」

「う、うん。」

「…ああ。」

二元に声を掛ける葉隠、それに応える緊張気味の尾白と無愛想な俺。

『屋内対人戦闘訓練、開始!!!』

さあ、始まるぞ